

幸子の映画

食べある記



★「真夏が似合う国」イタリア★

イタリアを舞台にした映画は数多く、情景の美しさと美味しそうなおなじみの料理の登場で一層身近に感じられて忘れがたいものに成りますが、この度はイタリアを北の方から旅してみる事にします。

ミラノとロシアを舞台にした「ひまわり」は戦争を背景にイタリアの二大俳優が見事な演技で魅了してくれました。戦争に行く何日か前に結婚し、そのままになった夫をロシアまで探しに行ったとき、丘一面のひまわり畑は圧巻でした。今は北海道各地にひまわり畑を見る事が出来ませんが、その度に白樺の墓標もセットになった映画のシーンが思い出され、「この下に捕虜が埋まっている」と言うせりふも忘れる事が出来ま

せん。

戦地で命を助けられて生活するようになった男、その家庭を探し出して訪ねたとき出てきたのは、パンにチーズ、りんごにサラミ、精一杯のご馳走だったに違いありません。残された妻が一人食べるシーンは固いパンだけをかじったり、スープ皿一枚だけだったり。同じ時代背景の「ブルーベの恋人」でも具の少ない「ミネストローネ」だけが出てくるシーンが有り、あの時代の食料事情が見えてきます。それにしても舌を巻いたのは結婚のお祝いに男の母が届けたのは二四個の卵、お父さんが結婚したときも同じ事をしてもらったとのこと、なんとそれを一度に全部割ってオムレツにしたのでした。

塩と胡椒だけの「ブレインオムレツ」卵がご馳走だったことは分かりませんが日本人だったらああゆうシーンには無いでしょう。なんとと言っても体に悪いですよ、野菜が無いのですから、食べきれない二人（一生卵と縁を切るわ）と言うのもうなずけます。

「旅情」で大人の恋と旅の夢を膨らませてくれた憧れの地ヴェニス。アメリカのハイミスの一人旅に始めに出てくるのがイタリアの薬草酒チンザノとバーボンの「カクテル」挨拶代わりに乾杯！彼女がドレスアップして出かけたサンマルコ広場の一番古いカフェCROFF、若いときから何回も見て三年前同じ場所に身を置いたときは感激で涙がにじみま



クッキングキャスター

星澤 幸子

text : Hoshizawa Satiko

した。同行のスタッフがカメラを回しているとかと勘違いした観光客に写真を撮られて笑い話になってしまいました。カクテルを頼んで口ツシーニの音楽を聴いて「この次はいいと二人で出かけるぞ」と密かな決意の私。イタリアは何といても太陽の明るさが違うこと食事が美味しいこと。長い国だけに地方によって特色があり観光客が増えるのも当然の成り行きでしょう、景色もさることながら食べ物の美味しさは旅の最大の楽しみですから。屋根付きのリアトル橋近くのレストラン、アラ・マドンナで天然うなぎの炭焼きを食べたことは最高の収穫。歯ごたえ、旨み、香りは今までに食べたことのない美味しさで。・赤ワイン

と戴いてもう最高！これから行かれる方は是非どうぞ。

恋にためらう主人公「汚いとか不倫だとかケチを付けずに空腹なら食べるべきだ」彼女は食べますが前途の無い関係に思い出を抱いて帰路につきます。自分の感情を制御できる大人だけが恋をする権利を持つのもしれません。買い物は女性にとって欠かすことの出来ない楽しみの一つですが、彼らの出会いのきっかけになった真つ赤なヴェネチアアグラス、私も買ってしまいました。映画で予備知識が来ましたのでサイン入りの本物を、手元に届くまで六月もかかって無事着きましたのに、家で一つ壊してしまいました。チャンチャン。



「旅愁」はフィレンツェを舞台にラフマニノフのピアノ協奏曲を織り交ぜながら、何回キャンティワインが出てきたことでしょうか。ドーム広場の近くに有るレストランで出てきた

オードブルは「生ハムとメロン」ロームでも何回も食べましたが北海道のように甘い物ではなく、野菜のよな感覚。暖かい地方独特のほやけた味では有ります。そのレストランで旅行者と知ってアメリカの軍人がスパゲッティの食べ方を伝授するシーンがありました。スプーンの中で丸めて口に入れるというものが、イタリア人はフォークだけで食べます。

そんなシーンにも映画の作り手のセンスが見え隠れするものです。イタリアと言えばローマ「ローマの休日」を思い出してイタリア映画を話す事は出来ません。人の造った文化を遺憾なく写し、テンポとロマンス、立場と思いやりを表現して不朽の名作ですね。

独身の時と二度旅しましたが、時代の経過を感じさせないくらい以前のままの姿で迎えてくれたのは有り難かったです。トレビの泉、サンピエトロ寺院、コロッセウム、サンタインジェ口城での格闘、サンタ・マリア・コスメディン教会でのハプニング等は今の映画に語り継がれていたりして。何といても髪の毛を短くしたオードリーがスペイン広場で「ジェラード」を食べるシー

ンは忘れがたく同じ場所でポーズを取ったのは私だけではないはず。街の各所にある市場も見逃すことは出来ません。その地の人々の胃袋を垣間見るには最高の場所、果物や菓子一つだけ買って食べながら見物するのがお勧めで、しかも言い値で買うのではなく交渉して買うのが楽しいのです。映画でもそんなシーンがありましたね、映画を作るときはその地の文化、名所をずいぶん研究して作られますので映画は知らない地の最高の参考になります。「お料理を作ってあげたい」という主人公の王妃、どんな物を作るのでしょうか。カフェ・グレコで涼しい顔で「シャンパン」を所望したのですから私のように経済的な食材でないことだけは確かでしょうね。トマトスパゲッティ、ペンネ、アクアパッツア大きくてもさっぱりしたピッツァ。シンブルでも本物の味わいがイタリア料理。三千年の文化遺産と使い続けられるルネッサンス時代の財産。世界遺産の半分はイタリアにありその半分はローマにあると言われます。王妃ならずとも「ローマは永遠に忘れ得ぬものとなるでしょう」



幸子の

映画食べある記